2014.12.17

小原院長の“いま一番気になる人・仕事”スペシャル対談

小原忠士×椿野央

平成2年の開院以来、24年間にわたり地元連島を中心に多くの住民の方から信頼を頂き、皆様の健康に貢献してきた小原整骨院。その小原院長が“いま一番気になる人・仕事”というテーマで、ゲストの方と小原院長とで対談をして頂きました。今回は古典鍼灸を通じて治療家として学ぶ姿勢について語り合って頂きました。(2014年12月14日（日）株式会社エミリンクにて)

ゲスト紹介

■ 椿野　央（つばきのひろし）（皇漢醫學林 代表）

1948年8月27日生の66歳
大阪府吹田市の明治東洋医学院鍼灸科を卒業の後、38年間に渡り兵庫県西宮市と兵庫県朝来市で鍼灸院を開業。並びに、伝統医学、伝統医術の研究と伝承につとめている。
皇漢醫學林（こうかんいがくりん）代表　（皇漢醫學とは仏教の伝来とともに、遣唐使が古代の中国医学を伝え、さらに日本独自に発展してきた医学を云う）
「神戸発・運動器疾患を語る会」講師、「皇漢醫學林・兵庫西宮」講師、「皇漢醫學林・岡山支部」講師、「阪神蒲公英会」漢方研究会員・講師。

■ 小原忠士（小原整骨院 院長）

倉敷市出身。地元である倉敷市連島で開院以来24年にわたり地域の皆様の健康に貢献してきた小原整骨院の院長。柔道整復師としての技術力は当然、その穏やかな人柄で多くの患者に慕われ、スタッフからの信頼も厚い。6月には株式会社エミリンクとして法人設立。代表取締役となる。

■　司会進行　俣野浩志（株式会社パッション）

岡山市出身。一般社団法人ウェブ解析士協会認定 初級ウェブ解析士。経営修士（MBA：香川大学大学院地域マネジメント研究科）。大学でマーケティングを学んだ後 11 年間印刷・デザイン業界に勤務。2009 年に岡山県産業振興財団主催のベンチャー・ビジネスプランコンテストにて奨励賞を受賞。2013 年大学院にて「住民主体の体験交流型プログラムが地域社会に与える影響についての考察」というテーマで、NPO のまちづくりを研究した。

学びに必要なことは、興味・関心を感じる知識への出会いと探究心

司会：まずは椿野先生と小原院長の出会いをお聞かせください。

小原：小原整骨院の鍼灸師である本山先生のお姉さんも鍼灸師なのですが、実は椿野先生の師匠の講座を共に受けた同期だったのですね。その経緯があって椿野先生を岡山にお招きし勉強しようと…そこに３年前から私も加わり勉強させていただくようになったのです。

椿野：そうなのです。本山先生（お姉さん）とは同期で古い仲ということもあり。断るに断れない（笑）…。それで岡山に来始めましたが、多くの鍼灸師に古典を伝えられる機会をいただきましたね。

小原：椿野先生には月一回、第二日曜日に小原整骨院にお越し頂き、「古典鍼灸勉強会」を開いてもらっているのですが、小原整骨院で開催するようになってからは…もう２年になりますかね、今まで様々なことを教えてもらってきましたが、それでも尽きない先生の知識や経験の深さにいつも驚いています。いったい、先生の知識の賜物とはなんなのでしょう？

椿野：それにはまず、なぜその世界に入ったかを話す必要があるね。私も初めからこの鍼灸など東洋医学の世界に興味があったわけではないのです。ごく一般的なサラリーマン生活もしていましたよ。５、６年くらい企業に勤めたのですが、その時分は西洋的ないわゆるアメリカナイズされた文化に憧れていた時期もあったのです。しかしその社会で生きていると、いつしか「何かこれは違う！」という違和感を感じるようになった。まあ平たく言うとサラリーマン生活が嫌になりドロップアウトしたのですよ。

小原：ええっ！そうなんですか？今の達観された仙人のような椿野先生の風貌からは想像できないですが、サラリーマンですか！しかもアメリカナイズされた文化とは…ヒッピーの世代ならなんだか納得です。

椿野：ははは。私は仙人ではないよ、霞を食べては生きていけないよ。とにかく当時は西洋的なものではなく、何かもっと精神的な自然に対することなどに目覚めていった。その中で

自分のことを知ること、体のことも知りたいと思うようになってね。ヨガや東洋哲学的なことに惹かれ、それを求めるようになっていった。反動かもしれないね、西洋から東洋に方向転換したのですよ。

小原：やはり西洋文化は物質的な世界観を基にした考え方で、東洋哲学は人生観、人に根ざしているという精神的な部分を重視しているという感じですか。

椿野：そうだね。文化や哲学などの考え方の優劣なんて比較するものではないのだけれど、東洋の方が、「いかに生きるか」という人の生き様を重視する傾向があるよね。ヨガや東洋哲学的な思想に出会ってからは、これはもっと突き詰めて本物に、自分自身のものにしなければと思った。

しかし、実際にはかなり迷ってね。そんな時に東洋医学の世界があることを知った。いろんな人に東洋医学を聞いてまわって、ようやく鍼灸学校の存在を知ったのです。それまでは鍼灸の治療なんて受けたことも無かったのですよ。

小原：椿野先生のことが、なんだかとても身近に感じてきました。勉強会での先生はあまりにも膨大な知識と技術で、いつも僕らを圧倒していますから、本当に先生の域まで到達するなんて、できる人がいるんだろうかと…。

椿野：そう、まさしく私もそうだったのです。出会った東洋医学に圧倒されたのですよ、あまりにも膨大で奥が深く、まさに知の宝庫だった。この知識の山を踏破できるかなんて想像すらできなかった。またそこで出会った鍼灸の古典の本、「経絡治療学」これは凄いと気がついて、これを深めていきたいと思ったのです。これが私が勉強したいことだと気がついた。しかし職業にしょうとは思っていなかった、当時はただ深く学びたかっただけだったのです。

そこから資格を取るのが目的ではなかったのですが、とりあえず鍼灸学校に入った。そこでは西洋医学的なものが多く、やはり学校は資格を取るための養成学校でしかないと思いましたね。本当に勉強したかったことはそこには無かった。しかし唯一勉強したいと思った講義に「漢方概論」があったのです。逆に言うとこの授業しかなかった。しかし脈診など、興味があることに関しては誰も教えてくれなかったね。

小原：椿野先生の知識への飽くなき探究心が見えてきたように思いますが…明確に勉強したい対象にご本人が気付いていたのですね。

椿野：もちろん。大切なことは「学びたい」という気持ちだけだった、ということなのです。ですから卒業後もそれを職業にする気は全くなかったのですよ。ただ、他に何もすることがなかったし、これしかないかなと思って…免許取れてその日から治療するようになっていた。職業にする気はなかったのに、卒業した時点で治療できる体制になっていた。実際に生計が立てられる形になっていたんだから不思議なものでしょう（笑）。

やはり私は学びたかったのでしょうか、昭和 51 年に卒業してすぐのことですが、人生の

師匠ともいうべき小寺敏子先生に勉強会で出会うことができたのです。幸運でしたね。当時は江戸時代（元禄時代）の本がテキストだったので、学んでいても全くわからなかった。しかし凄い知識を勉強していることは実感していた。それから小寺先生の講義を聴くようになった。当初は月１回〜2 回、一回２時間くらいでしたかね。当時小寺先生は 60 歳くらいでとても上品な感じの方でした。先生の曾祖父は、あの有名な中浜万次郎（ジョン万次郎）ですよ。

古典鍼灸においては小寺先生が有名だった。他にも四国には池田太喜男先生や池田政一先生などいらっしゃったが、小寺先生は日本を代表する古典治療の先生でした。

小原：椿野先生は小寺先生の一番弟子になられるわけですね。

椿野：一番弟子とかそういう意識はあまりないですね。小寺先生の教えを学び忠実に実践していますが、それだけではありませんしね。そこから自分なりに改良はしていますから。

例えば、東洋医学の教科書とも言われる「黄帝内経（こうていだいけい）」、素問、霊枢（紀元前、前漢時代の本で、本来は木簡や竹簡などに記録されていたもの）などを学ぶ際に、漢文の読み方を知らないと理解できない。私たちが学んでいた頃はそこからがスタートだったのです。後に小寺先生はかな読みの「和訓素問霊枢」を出版され助かりましたが。

最初は自分の理解のために、漢文を講義の最中に文章を分解して、読みやすく直していた。それがキッカケで「デジタル素問」を書き始めたのです。普通はレ点が入っているものとか、漢文のルールが分からないと読めない。ただ、漢文がとっつきやすいのは、漢字は象形文字なので絵としてみることができる。どんな意味なのか想像ができるのですよ。アルファベットは記号の羅列なので想像ができないが、漢字はアートなので一目瞭然、その言葉にどんな意味があるかある程度は理解できる。ですから何もなくても記憶されやすいという面がある。そこは理解を助けている部分ですね。

小原：「黄帝内経」といえば、「女は７の倍数、男は８の倍数の年齢の時に節目を迎え、体に変化が訪れる」という…某薬用酒の CM に使われていますよね。割と自分たちが気付いていないだけで、身近に入り込んでいる知識なのですね。

椿野：そうだね。確かに身近に入り込んでいるように見えるけれど、皇漢醫學はただの民間療法ではないのですよ。もともと「黄帝内経」の医学の歴史は聖徳太子が遣唐使を中国に派遣し、仏教や医学書を持ち帰ったところに端を発するのです。持ち帰られた資料をもとに大宝律令が制定され、国家的に整備するというプロジェクトが開始されたのです。この時に宮内庁で「典薬寮」と言われる医学教育機関ができ、医学を志す者はこの大学か、地方の国学などの教育機関で学ばなくてはいけないという制度が始まったのです。今でいうエリートだよね。

さらに江戸時代になると漢方や鍼灸が最も盛んになり、日本の気候や体質に応じた医学に発展していきました。しかし明治の文明開化と共に医学も西洋一辺倒になり、何百年も続いた漢方医学はただの民間療法という領域に追いやられてしまった。最近は漢方も鍼灸も見直されてきましたが…古典はまだまだですね。

小原：なるほど、私たちは、身近に根付いている知識の源流を学んでいるのですね。東洋医学は深く膨大な知識量があり、習得するのに途方もない労力が…という感じを抱いていましたが、身近にあるとわかると、なんだかやる気が出ますね。椿野先生が、誰にでも読み易いようにデジタル素問として変換されているものを、テキストとして使わせて貰っていることも大きな要因ですが。

椿野：ははは、そう言われると私も身が引き締まるのだけれどね。実際のところ小原先生ところでセミナーをすることが、期限ができて翻訳が進むので良いきっかけになっているのですよ。今は西宮の経絡の勉強会、神戸での臨床検討会（整形外科の先生方と行っている）のところでもセミナーをしているのですが。まだ傷寒論、難経などは現在作成中だしね。まだまだやることがある。

学ぶことは大切だ、しかし治療家として忘れてはならないことがある。

椿野：ところで、小原先生、私たちが東洋医学を学ぶ上で忘れてはならない、とても大切なことがあるのですよ。わかりますか？

小原：はい、もう何年も椿野先生をお招きして勉強会を開催しているので、しっかりと身についています。臨床に活かすことですよね。

椿野：その通りです。私たちは、ただ勉強するのではなく、今に活かせるようにしなければならない、学者になるわけではないのですから。毎日の臨床にいかに役立てるかが目的なので…。だから先人の知識を漏れなく一字一句原典に忠実にわかりやすく翻訳したいと思っているのです。それが使命とも思っています。
　そんな思いもあり翻訳した後に、漢方も、傷寒論にのっていることは全部試しています。昔ながらの製法で薬草を取り、丸薬にしたり、粉末にしたり、全部の工程を自分で作り試してみたのです。そうすると、どういう疾患には、どういうものが効くかが解るようになった。やはり傷寒論に書かれていることは正しかったのです。

小原：私たちが椿野先生の知識を得ようとした場合、とんでもない時間が必要だと思うのですが、楽をしたいというのではなく、早く臨床に活かしたいと考えた場合、何か手っ取り早く学ぶ方法はないのでしょうか？

椿野：私の勉強会を聞いて、さらにまとめるということかな。あとはパソコン、ハイテクな物は有用なので使う方が良いですよね。手段としてのハイテク機器（現代技術）は使うべきだと思います。効率化が図れるしね。

小原：今思えば、学生時代にこういった勉強会に参加できていたらと思います。

椿野：確かに、若い自分に出会っていれば…と思うことはあります。しかし、どこに興味を持つかを自分で探さなければならないことは変わらない。それは出会いのタイミングの問題な

ので、早く出会っていてもその時には興味・関心を全く示さないかもしれない。それよりも、治療家となる決心をした時に、どのような治療家・治療法を目指すかにもよるのではないかな。自分が何に興味があって、目的が見えたら、意欲さえあれば何でもできると思いますよ。目標と意欲をいかに見つけていくか、それが若い時分にやらなければならないことかもしれませんね。

もちろん治療家として食べていけることも大切だが、苦しんでいる患者さんが楽になって、楽しく生活しているのを見て、こちらも喜びがある。そんな状況を作れる人生が良いと思う。古典に書いてある生き方を伝えていきたいしね。患者さん一人ひとりが、病気が良くなったという実感をしてもらいたい。

小原：治療家として学ぶという姿勢が大切だということが、よくわかりました。

学びを継続させるには、学びのプロセス自体を楽しむこと

司会：ところで椿野先生と他の先生との最大に違いとはどういったところなのでしょうか？

椿野：他の多くの先生に診てもらったこともないし、あまり比較したことはないですね。

小原：やはり古典がベースなので他とは違うと思いますね。古典は難しすぎて…他とレベルが違います。脈診をこれほど細かく診れる先生はなかなかいないですし、本当にできる先生は少ない。そもそも古典はなかなか語れないでしょう。治療も根本的に違いますね。

椿野：確かに、他の鍼灸師とは違うのかもしれませんね。他の医師からの紹介で来られることもありますから。ドクターとの信頼もあって鍼灸の話を聞きたいという外国人には紹介してくれているようです。外国の方が治療に来られることもあります。

小原：先生は実際には、どれくらい研究されているのですか？

椿野：始終研究ばかりしているわけではありませんよ。テレビもみるよ。

小原：それにしても、あらゆる古典が頭に入っているのが信じられない。

椿野：師匠の小寺先生は１日に治療するのは一人二人で良いと言っていたのですが、それでは食べていけない（笑）。でも昔から看板を掲げたり、宣伝したりしたことはないですね。なぜかクチコミで広がっていっている。

小原：今は主に何を勉強されているのですか？

椿野：今は講義するためのプレゼン原稿を作っているだけですよ。昔はグラフ用紙にデジタル式に並べて書いて、書いたものをパソコンに取り入れて作っていたのですが。今は素問、霊枢が中心。好きなことをして過ごしている感じですよ。プレゼン作りながら半分寝ていたりもしている。夜はお酒も呑むし、料理もするし、畑仕事もしているよ。あっ週２回は合気道もしてますよ。理想の生活に近づいているかもね？

小原：先生はいつも自然体ですよね。そういう生活がもの柔らかなお人柄の理由なのですね。

椿野：知識も技能も本物にならないと患者さんには使えないですよね。私でもまだまだというものがある。まだ向上心は昔と変わっていないのですよ。ただ、勉強するにしても継続する、コツというかポイントはある。どうやったら一番よく頭に入るかなど…。それはただ単にガムシャラであることではないよ。

例えば、勉強自体を面白くしたら良い。勉強はすればするほど楽しくなるものです。楽しくなれば勉強する方法ももっともっと面白くなっていきます。

漢文もデジタル化すると立体化するので画像として出てくる。3D 化して見れるように作っていかないと生きたものにならないのです。それに出来ていく工程が面白くならないと…。土もタネを蒔いただけでは栄養もないし作物は出来ない。下地作りが必要ですよね。耕して肥料を与えてなどのね。古典鍼灸で言えば、文章は平面でしかかけないでしょう、でも使う時にはそれを立体化しなければならない。体は立体だからね。そこの部分が下地作り。

小原：古典鍼灸は膨大な量と深い知識に圧倒されるので、椿野先生が元気なうちに全てわかりやすいテキストに…ほんと長生きして貰わないと社会の損失ですよ！勉強会に参加しているみんなで協力してシェアしていかないと、私もしっかりと伝えていきたいと思います。

椿野：大志を持って喜びを持って。古典はただの学問ではないですからね、古典に書いてあることは哲学ではないのです。哲学はただの考え。古典は実際に役に立つものなので、今に活きるようなものにしないといけない。ただの文章のままではダメ。だから、昔の人の言葉を現代に合わせて生きた言葉にする必要があるのです。

古典を残していきたい、古典を古典で終わらせたくない、それは小寺先生の意思というよりも、もう自分がやっていきたいことなのです。素問には、滅多な人に教えてはいけないという意味のことが書いてある。しかし私は、古典を伝えていかなければと思っています。

小原：経絡治療や鍼灸を学んでいる学生には一度椿野先生に接してもらいたいと思います。椿野先生は質問になんでも答えてくれる。伝えてくれていることが感じられます。古典鍼灸は世界に通用する治療法です。難しいですが。

椿野：確かに、古典鍼灸はドイツやフランスで盛んなのです。外人への治療の方がやりやすい面もありますしね。先入観がないのでシンプルで率直に聞いてくれるから。とはいえ、日本の治療家も古典鍼灸を学んで、多くの患者さんを癒して欲しいと願っています。

小原：椿野先生、今日はお忙しいところありがとうございました。

椿野：こちらこそ、ありがとうございました。

・・・・・・・・・

■ 椿野鍼灸庵
〒663-8003 兵庫県西宮市上大市 1-6-36　Tel 0798-53-2310

椿野鍼灸院（奥之院）
〒679-3431 兵庫県朝来市新井 634-18　Tel 090-3056-8410

■ 小原整骨院（本院）

〒712-8014 倉敷市連島中央 2-3-22　TEL&FAX：086-444-9595

受付時間

受付時間	月	火	水	木	金	土	日
8:00～13:00	○	○	○	○	○	○	×
15:00～19:15	○	○	○	×	○	×	×

こはら鍼灸整骨院（倉敷分院）

〒710-0003 倉敷市平田 615-1　TEL：086-486-3363